

演題 : 「歴史に学ぶこれからの日本の生き方、日本の心」

講師 : 歴史作家 童門 冬二 氏

童門先生には今まで 2 回、日本歴史の立場よりお話を伺ってきました。また当会の会報には日本の歴史に関するエッセイの掲載をお願いしております。今回は歴史より眺めた日本の生き方、日本の心についてお話を伺いましたので、その大要をご紹介します。

1) 今の若い者は：先日鹿児島旅行の折、熊本との県境の野田町を車にて通行中、7～8 名の子供達の道路横断に出会った。車を止めて待っていると、横断後リーダーに従って、一列に並び、お礼の挨拶をして行った。関が原の合戦の後、薩摩藩は徳川幕府への遠慮から、鶴丸城の増強はせず、要地に外城と称する防衛組織を設け、年少者を集め、指導者の下に教育訓練を行っていた。鹿児島県下にはこの習慣が残り、目上を敬い、礼儀正しい、古き良き時代の子供達がいたものと思われる。

先年、若狭湾にてロシア船が座礁して重油が流出、湾岸が汚染され、湾岸線清掃のため、大勢のボランティアが参加した。この中に神戸の高校生がいた。阪神大震災の時、各地よりの援助が忘れられず、そのお礼もかねて参加したものであった。これも今の日本の心である。

2) 日本人の心：アメリカ太平洋岸の大地震の時、テレビではその被害状況と住民による商店の略奪行為が報じられたが、先年の阪神大震災では、被害状況と共に被災者の避難先での状況、整然とした援助物資の配布等が報じられた。ある避難所では、赤子のおむつがなくて困り果てた母親に配給になったばかりの手拭が提供される等、被災者同士の暖かい思いやりが報じられた。

最近、日本の教育では、修養、教養に関することが疎かにされ、感性が衰えて他人への配慮がなくなってきたが、アメリカと日本の差を見ると、日本では非常事態でも良き日本の心が残っている。

アメリカでは、「いかに相手の立場を考えられるか」を見るために、これを数値化して「EQ ; 心

の指数」を定め、指標としている。東洋には、2000 年前より、孔孟の教え『恕』なる言葉がある。これは他人に対する思いやりの心・他人の悲しみを見て慰める心の事で、日本人として大切にすべき心である。

3) 澁沢栄一：澁沢栄一は埼玉の豪農の家に生まれ、若い頃は尊王攘夷の志士として活躍したが、後、富岡に製糸工場を造り、地域の指導者の育成に努めた。後に徳川慶喜に仕え、一橋家の財政運営に当たった。パリ万国博覧会の時、水戸藩主徳川昭武に従い事務長としてパリに滞在したが、大政奉還のために日本よりの送金が途絶え、ナショナルバンクのヘラルドの申し入れに従い持参金の運用を依頼した。澁沢はこの間バンクシステム、資金の運用を学び帰国後の改革に備えた。明治 2 年帰国すると、徳川本家は静岡 70 万石の大名になっていて、昔ながらの家臣を抱え困窮していた。澁沢は家老大久保一翁より財政担当を任された。この時パリより残金 2 万両を送金して来たが、澁沢はこれを基金として静岡商法会議所を設立、困窮武士に金を貸し茶の栽培を奨励した。これが成功し資金は回転して産業振興に役立った。その後、明治政府に招かれて税政改革を担当したが、志を得ず退官した。この時澁沢は優位の人材は全て政府に集められ、民間に人材のなくなる事を憂い、東京商法会議所を造り、有能な実業家、財界人の育成を図った。大阪では薩摩藩の五代友厚が大坂商法会議所を設立した。

明治 6 年第一国立銀行が設立され、この時澁沢栄一は行員に「論語と算盤の一致」を説いた。銀

行は算盤勘定である。しかしこれに夢中になると人の道を外れる事がある。人の道を守るために机上に論語を置き常にこれを読むことを論している。また澁沢栄一は生涯、無数の施設を設立しているが、徳川吉宗の建てた小石川養成所の後継である東京市立小石川養育院の初代院長となり、生涯この職を務めた。常々家庭は小さな政府で、家族が責任と権限を持ち自立しなければならない、国も家庭を原点とすべきである事を説いていた。これもまた日本の心であろう。

4) 福沢諭吉： 福沢諭吉は蘭学を学び、第一人者をもって任じていた。日本開国後、これを試すために横浜に来たが、オランダ語は通用せず、英語の看板を読むことも出来ず、日本の国際語は英語なることを痛感した。福沢は直ちに矛先を英語に転じ、これを完全に自分のものとした。咸臨丸訪米の時、ジョン万次郎と共に通訳として乗船し訪米を果たした。日本への土産はウェブスター英語辞典で、後に慶応義塾大学に置かれ、日本近代化に貢献した。

ある時、福沢は勝海舟、榎本武揚に旧幕府にて要職を務めた両名が、明治政府にても要職を占めている気持ちについて質問した。「忠臣二君に仕えず」福沢には儒教の面から、武士道の面から許せなかったものであろう。

5) ラスト・サムライ： この侍は日本人以上に武士道を把握している。この映画の中に見る侍の責任・決断・行動・沈黙の身の処し方・潔さは守るべき日本の心ではなかろうか。

6) 海外より見た日本の心： アメリカのドラッグ一等経済人は、捨て去った日本式経営の全てが悪かったのか疑問を持っている。日本式経営の土

台は、企業一顧客の信頼関係、企業上下の結びつきにあった。アメリカでは、「誰のため」の質問に対し株主のため以外の返答はない。日本では今でも「うち」なる言葉が生きている。一つの船に乗って、客のため、会社のため働いている。

日本の労使関係は世界が真似したくても出来ない美しい関係にある。年功序列・永年雇用・一括採用等々、もっと自信を持ってよいのではなかろうか。

7) 江戸時代の日本： 江戸時代には3つの山と3つの谷があった。山は経済興隆期で、元禄、明和・安永、文化・文政に当たり、谷は構造改革の時代で、享保、寛政、天保に当たる。何れの時期も個性の強い独裁者的指導者により行われた。

徳川時代の人口を見ると、家康時代：1300万人、吉宗時代：2600万人、明治初期：3300万人で、吉宗までの130年間に1300万人の人口増加が見られる。これは吉宗の構造改革の成功によるもので、何れの改革もこの改革を手本として行われている。吉宗の改革は、彼の人間性による少子化対策で、これまでの間引きによる人口抑制を止め、食糧増産による人口増加策であった。まず、衣・食・住の付加価値を上げ、内需の増加を図り、海外の農業技術を入れて各種食糧の増産を図る。また天文・気象を明らかにして、気象予測、治水事業を興し、動物園・植物園を設けて食糧増産の糧とした。診療所を建て、人口増加の実を図った。また目安箱を設けて民の声を聞き、これに基づいて有効な計画を推進した。墨田堤・飛鳥山・玉川堤の桜の名所は今も東京都民の目を楽しませている。吉宗の人間性に基づく構造改革は為政者としての日本の心であろう。

私どもの心の奥底にしまい込まれていた日本人として当然の美德が、本日の先生のお話により、生き返ったように思います。この日本の心を今の若者達に伝え、正しい日本人を育てて行くのが我々年寄りの役目でしょう。

(常務理事 安達 勝雄 記)